特116
704

謡

氷室
善界
芭蕉
百萬
舩弁慶

十六

始

特116
704

帝國圖書館藏

宗家觀世

大正
11. 3. 16
内交

# 氷室

内十六巻ノ一

概説

一臣下丹後國九世戸に参詣の歸途、丹波國なる氷室山に立寄りしに、氷室守の翁あり、氷の供御の由来を語りて姿を隠しぬ。やがて天女現れ、舞を舞へば、寒風吹き来りて氷室の神姿を現し、大君に捧ぐる氷を守護して都に送り給へる様を目のあたりに見せけり。

津田の入江青葉後瀬の山々も
一見しそれより都に帰らんやと
存じ候
〽花の名の白玉椿八千代
経て白玉椿八千代経て緑にかへる
空なれや雲の後瀬の山続く青
葉の木陰分け過ぎて雲路の末
の程もなく都に近き丹波路や

氷室山にも着きにけり氷室山にも
も着きにけり　〽急ぎ候程に
丹波の国氷室山に着きて候この
処の人を待ち氷室のいはれをも
委しく尋ねばやと存じ候

シテ附ツレ男二人上　真ノ一セイ　拍子ニ合ハズ

〽氷室守春も末なる山陰や花の
雪とも集むらん　〽深谷に立てる

シテサシ上　松陰や冬の氣色を殘すらん

それ一花開けぬれば天下の皆春
なれども松の常盤の色添へて
二人　緑に續く氷室山の谷風はまだ
音さえて氷に殘る水音の雨も
靜に雪落ちて。げに豐年をも。示
する御代の御調の道もすぐなるべし

下歌　國土豐に榮ゆくや千年の山も
近かりき。上歌　變らぬや。氷室の山の
深緑。氷室の山の深緑。春の氣色
のありながら。この谷陰の去年の
まゝ深冬の雪を集め置き。霜の
翁の年經て。氷室の御調守るなり
氷室の御調守るなり。ワキ　いかにこれ

拍子合

○小謡

ある老人に尋ぬべき事の候
シテ「こなたの事にて候か何事と御尋
ね候ぞ ワキ「おことは此氷室守にて
あるか シテ「さん候氷室守にて候
ワキ「さても年々に捧ぐる氷の供御。
拝みは奉れども在所とみる事ハ
今始めなりさてさていかなる構に



より春夏まで氷の消えざる謂
委しく申し候へ シテ語「昔帝狩の荒野に。
一村の森の下庵ありしに。頃は水
無月半なるに。寒風御衣の袂に
うつりてさながら冬野の御幸の
如し。怪み給ひ御覧ずれば。一人の
老翁雪氷を屋のうちにたくはへたり。

拵ヘル心 かの翁申すやう。それ仙家には紫
雪紅雪とて薬の雪あり。翁も 氣ヲカヘ
かくの如くとて氷を供御に供へ
しより。氷の物の供御始りては
ワキカヽル上 拍子ニ合ハズ 謂を聞けば面白や。さてさて氷室
の在所在所。上代よりも国々に
あまたかはりてありしよなう

シテ詞 拵ヘテ まづ仁徳天皇の御宇に。大和の国
闘鶏の氷室より。供へ初めし氷
の物なり ツレカヽル上 又その後山陰の室
も霰もさえ續く。たよりの風も
松が崎 シテ詞 拵ヘテ 北山陰も氷室なりしを
ツレカヽル上 又この国に移して。深谷も
さえけく谷風寒氣も シテ 拵ヘテ 便り

ありとて今までも。末代長久の氷の供御のため。丹波の国桑田の郡に。氷室を定め申すなり

ワキカヽル上「げにげに翁の申す如く。山も所も木深き陰の。日影もさゝぬ深谷なれば。春夏までも雪氷の消えぬも。その理なり

シテ同「いや所によりて氷の消えぬを承るは。君の威光もあきらかなり

ワキカヽル上「たゞ世の常の雪氷の

シテ同「一夜の間にも年越ゆれば

ワキカヽル上「春立つ風にて消ゆるものを

シテ「されば歌にも

ワキ「貫之が

上音同 拍子合「袖ひぢて掬びし水の凍れるを。掬びし水の凍れるを。春立つけふの風やとくらん

○小謡

しと詠みたれば。夜のまに来る。春にて
だに氷は消ゆる習ありましてや。
春過ぎ夏たけて。や水無月の
あるまでも。消えぬ雪の為氷供
御の力にあらで。いかでか残る雪
あらんいかでか残る雪あらん。
クリ地上 ネ掛 拍子ニ合ハズ
それ天地人の三才にも君をもつて

○サシ両独吟
○切迄囃子

主とし。山海萬物の出生。即ち王
地の恩徳あり。唐土長く固く。
帝都遐に昌あり。仏日輝ます
ますにして。法輪常に転ぜり
シテ中
陽徳をとりも。導へずして雨露
霜雪の時を得たり。夏の日に。
あるまで消えぬ冬氷。春立つ風

や。よぎて吹くらん。げに妙なれや。
萬物時にありながら。君の恵みの
色添へて。都の外の北山に。つゞくや
葉山の枝茂み。このもかのもの下
水も。あつむる雪の氷室山。土も
木も大君の。御影にいかで洩るべき。
げにわれながら身の業の。浮世の

数にありながら。御調みも取り別
きてあまり天照す氷の物や。他にも
異なる捧物。叡感もつて重し
き。玉體を拝するも。深雪を運ぶ
かひなれや。然れば年立つ初春の。
初子の今日の玉箒。手にとるからに
ゆらぐ玉の。緒さびたる山陰の。

去年のまゝにて降り續く雪の
ゆづりをかき集めて木の下水
にてかきいれて。氷と重ね雪を積み
て待ちとれば春過ぎて又や夏山に
ありぬればいとゞ氷室のかまへして。
立ちさる事も夏陰の。水にも
すめる氷室守。夏衣なれども袖

さゆる氣色ありけり。ロンギ上「げにげに妙
なりや氷の物。げにげに妙なりや
氷の物の御調の道も直にある
都にいざや帰らん」シテ上「暫く待たせ
給ふべし。そもそも山路のおついでに
今宵の氷の御調。備ふる祭御覧
ぜよ　地上「そもや氷調の祭はいかなる

事にあるやらん、人こそしらね
この山の。神木神の。氷室を守護
しなり。毎夜に神事あるなりとい
ひもあへねば山暮れて。寒風松聲
に聲たてて時ならぬ雪降り落ち。
山河草木おしなべて。氷を敷きて、
瑠璃壇に。あると思へば氷室守の。

氷を踏むと見えて室の内に入りに
けり氷室のうちに入りにけり（中入来序間）

地上　天女出端　拍子ニ合ハズ
楽に引かれて古鳥蘇の舞の
袖こそゆるくなれ（天女舞）

後ツレ天女ワカ上
懐らぬや。氷室の山のふかみどり

地上　ノル　頭手
雪をめぐらす舞の袖かな

後シテ氷室神上　ノラズ　拍子ニ合ハズ
曇なき。御代の光も天照らす。

氷室の、御調供ふなり

地　供へよや。供へよや。さもいさぎよき。水底の砂長じて。巌の陰より

地　山河も震動し。天地も動きて。寒き風頻りて。肝をつめて。紅蓮大紅蓮の氷を戴く氷室の。神體さへ燿きてぞ現れたる。

シテ　谷風水邊冴え凍りて。谷風水邊冴え凍りて

シテ　月も燿く氷の面。

地　萬境と映す。鏡の如く、

シテ　清風梢を吹き拂つて

地　陰も木深き谷の戸に。

シテ　雪は

霰の横ぎりて岩もるしぶき水もさゞれ石の。深井の氷に閉ぢつけらるゝと。見えつ見えつ浮み

○仕舞

出でたる氷室の神風。あら寒や。
冷じや。畏き君の。御調なれや。
畏き君の。御調なれや波も收むる
氷。水を鎮むるも氷の日に添へ
月に行き。年を待ちたる氷の袖の
供御。供へや。供へ給へと采女の
舞の雲を廻らす小忌衣の袂に
添へて。薄氷を。碎くる碎くる。解か
すな解かすなよ氷室の神は。氷を
守護し。日影を隔て。寒水をそゝぎ。
清風を吹かして。花の都へ雪を分け。
雲を凌ぎて北山の。すはや都も
見えたり見えたり急げや急げ。
氷の袖を。供ふる所も愛宕の郡

捧ぐる供物も。日の本の君に。御調物こそ。めでたけれ。



# 善界　概説

内十六巻ノ二

善界坊といへる唐土の天狗の首領、日本に渡りて其の佛敎を妨げんと思ひ立ち、先づ愛宕山に太郎坊といへる天狗を訪れ、同じくは心を一つにして自他の本意を遂げ給へと誘へば、さらば間近に比叡山在り、あれこそ日本の天台山なれば心のまゝに窺ひ給へ、道しるべせんとて諸共に立出でぬ。時しも比叡山の一僧、内裏に赴かんとして下山せしに、空のけしきものすさまじくなりぬと見れば、善界坊立ち現れ、邪法を唱ふるより、僧は不動の咒を誦せしに、明王の來援あり、續いて神佛亦加護を垂れしかば、さしもの大天狗も恐れをなして逃げ歸りけり。

此曲丸テ手強ク前後トモ堂々トシテ謡フベシ

| 役別 | | 装束附 |
| --- | --- | --- |
| 前シテ | 客僧善界坊 | 兜巾　篠懸　着附厚板　白大口　水衣　腰帯　扇　刺高珠数持 |
| ツレ | 太郎坊 | 兜巾　篠懸　着附厚板　白大口　水衣　腰帯　扇　刺高珠数持 |
| ワキ | 比叡山ノ僧 | 金入角帽子(沙門ニ着)　織絡　着附厚板　白大口　水衣　腰帯　扇　珠数 |
| ワキツレ | 従僧 | 角帽子　着附厚板　白大口　縷水衣　腰帯　扇　珠数 |
| 後シテ | 天狗善界坊 | 面大癋見　赤頭　大兜巾　赤地金襴鉢巻　着附厚板　狩衣　半切　縫紋腰帯　羽團扇持 |

| 季 | 不定 | 曲柄 | 五番目 |
| --- | --- | --- | --- |
| 所 | 前 山城國葛野郡愛宕山<br>後 山城國愛宕郡比叡山 | 稽古順 | 三級 |

# 善界

竹田法印作

シテ善界坊　手強ク雄カリ　次第上　ツヨク拍子ニ合

雲路を凌ぐ旅の空。雲路を凌ぐ旅の空。出づる日の本を尋ねん

シテ　詞　手強ク

これは大唐の天狗の首領善界坊にてゆ。さても我が国に於いて。育王山青龍寺。般若臺に至るまで。少しも慢心の輩をば皆我が道に

誘引せずしては叶ふまじ。真や日本は小国なれども。神国として。仏法今に盛なる由承り及びて候。急ぎ日本に渡り。仏法をも妨げばやと思ひ候。

○小謡　道行上　強クサラリ

○名にし負ふ。豊葦原の国つ神。豊葦原の国つ神。青海原にさしおろす。天の瓊矛の露なれや秋津洲根の朝ぼらけ。そなたも末は遠からず。住む日の神の御国はこれかとよ。神の御国はこれかとよ。

急ぎ候程に。これははや日本の地に着きて候。まづ承り及びたる愛宕山に立ち越え。太郎坊に案内を申さばやと

なじかはこれはや愛宕山にてあり
げにや山の姿木の木立これこそ
われらが住むべき處にては　いかに
案内申し候

ツレ太郎坊　誰にてわたり候ぞ

シテ　これは大唐の天狗の首領善界坊
にて候が御目に懸り申し談ずべき
子細の候ひてこれまで遥々參りて候

ツレ　さては承り及びたる善界坊にてわた
り候かまづ我が庵室へ御入り候へ
さて唯今は何のために御出候ぞ

シテ　さん候唯今參ること餘の儀
にあらず我が國に於いて育王山青
龍寺般若臺に至るまで少しも
慢心の輩とて皆我が道に誘引せ

ずといふ事なし。眞や日本は小國なれども神國として。佛法今に盛なる由承り候ふ間。少し心に懸り。遥々これまで来りて候。同じくは所存を一つにして自他の本意を達し給へ

ツレ「さてはやさしくも思し召し立ちたるものかな。それ我が國は天地開闢よりこの



方。まづ以つて神國たり。されば佛法今に盛なり。まづまづ間近き比叡山。あれこそ日本の天台山よ。心のまゝに窺ひ給へ

シテ「さてはいよいよ便あり。それ天台の佛法は。權實二教に分ち

ツレ「又密宗の奥義を傳へ

シテ「顕密兼学のところあるを

ツレ「われら如きの類と

してたやすく窺ひ給ふ事
蟷螂が斧とかや猿猴が月に相同じ
かくは知れどもさすがなほ。我慢増
上慢の心の便を得んと因位も大聖
の威力をいよいよ害し。連ねたり
それ明王の誓約まちまちなりといへ
ども。その利益餘尊に越えて正しく

○サシ曲　獨吟

火生三昧に入り給ひて一切の魔軍
を焚焼せり　外には忿怒の相を
現ずといへども内心慈悲の御恵凝念
不動の理を顕し。但住衆生心想之中
げにありがたき悲願かな　然りとは
いへども輪廻の道を去りやらで魔境
に沈むその歎思ひ知らずやわれ

か、、ながら。過去遠々の間に。さすが見佛聞法の。その結縁の功により。三悪道を出でながら。なほも鬼畜の身をかりて。いとゞ佛敵法敵となれる悲しさよ。今この事を歎かずは。未来永々を、経るとても。いつか般若の智水を得て。火生三昧の焔をも遁れつべき

シテ上ヲ

世の中は夢か現か現とも夢とも いさや白雲の。かゝる迷を飜し佛眼せんとは思はずして。いよいよ我慢の幡鉾の靡きもやらで徒に。行者の床を窺ひて。降魔の利劔を待つてこそはかなかりけれ。かくて時刻移りなば。いざもろともに立ち出でゝ。

比叡の山邊のしるべせん

シテ上 「法のため。今ぞ愛宕の山の名に。頼みを懸けて思ひ立つ雲の梯うち渡り

地上 「我が名やよそて髙雄山。東を見れば大比叡や

シテ 「横川の杉の梢より

地 「南に續く如意が嶽。鷲のお山の。雲や霞も嵐と共に。失せにけり

嵐と共に失せにけり、 中入來序間

ワキ僧 ワキツレ天上 一セイ 「勅を受け。我が立つ杣を出でながら。急ぐも同じ名に高き。大内山の道あらん

ワキカル上 「かくてやうやう大比叡をと。下りつ行けば不思議やなあれに見えたるさがり松の

上音同 「梢の嵐吹きしきり。梢の嵐吹きしきり。雲となり

雨となる山河草木震動して天に輝く
電光大地に響く雷は月魄を暗
まかすてはそも何の故やらん
てはそも何の故やらん

後シテ天狗上 手強く大きく確かに
大癋 拍子ニ合ハズ

そもそもこれは大唐の天狗の首領
善界坊とはわが事なり。あらおそろしや
いかに御坊。今更何の観念をかあせる。

中 それ若作障碍即有一佛。魔境と説
けりあら痛はしや欲界の内に生るゝ
輩は 地 悟の道やそのまゝに魔道の
巷となりぬらん。不思議や雲のうち
よりも。不思議や雲のうちよりも。
邪法を唱ふる聲すなり。固より魔
佛一如にして凡聖不二なり。自性清

○仕舞

浄天然動きわき。これを不動と名
づけたり、聴我説者得大智慧。
吽多羅吒干満 その時御聲の
下よりも。その時御聲の下よりも。
明王あらはれ出で給へば。矜迦羅制
多伽十二天。各々降魔の力を合せて。
みさきを拂つておそします 明王

諸天へさて置きぬ。明王諸天へさて置
きぬ。東風吹く風に東を見れば 山王
権現 南に男山西に松の尾北野や
賀茂の山風神風吹き拂へば。さても
て
に飛行の翅も地にておち力も槻弓
の八洲の波の。立ち去るとみえつるが
又飛び来りぎるても。かほどて

妙なる佛力が力今より後、来るまじとの聲ばかり虚空に殘り。との聲ばかり虚空に殘つて姿は雲路に入りにけり。

# 芭蕉　概説

内十六巻ノ三

唐土楚國小水といへる所に山居せる僧の許に夜毎人の来れるけはひあるより、一夜月の光に窺ひ見れば一人の女なり。如何なる者ぞと尋ぬれば、佛縁を得ん爲に參る者なるが、願はくは御法を說きて聞かせ給へと乞ふ。僧其の心をめでゝ庵の内に入れ藥草喩品を讀みて聞かせば、女は喜びて雪の中の芭蕉の僞れる姿を見するも恥づかしとの意を述べて歸り行きぬ。やゝありて芭蕉の精女人の姿して現れ、世の定め無きを語りて舞を舞へるが、秋の風吹きすさむまゝに一本の破れ芭蕉となりて殘りけり。

此曲ハ閑カニ花ヤカニナラヌ様心シテ謡フヲ宜シトス
小書 三度ノ次第

| 役別 | 装束附 |
| --- | --- |
| ワキ 僧 | 角帽子 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 扇<br>珠數 経懐中 |
| 前シテ 女 | 面深井 鬘 無色鬘帯 着附摺箔<br>無色唐織着流シ 右ニ珠数左ニ水桶持(無シニモ) |
| 後シテ 芭蕉ノ精 | 面深井 着附摺箔 長絹 色大口 縫紋腰帯<br>無色扇 |

| 季 | 八月 | 曲柄 | 三番目 |
| --- | --- | --- | --- |
| 所 | 唐土楚國小水 | 稽古順 | 一級 |

# 芭蕉

禪竹氏信作

ワキ僧詞 閑カニ

これは唐土楚國の傍。小水と申す所に山居する僧にて候。さてもわれ法華持經の身なれば。日夜朝暮かの御經を讀み奉り候ところ。殊更今は秋も半ばの夜すがら怠る事なく候ふに不思議なる事

候この山中にわれならで又住む
者も無く候に夜な夜な讀經の
をりふし庵室のあたりに人の
おとなひ聞え候今夜も来りて
候はゞいかなる者ぞと尋ね
ばやと思ひ候 既に夕陽西に遷り
山峡の陰凄しくして鳥の聲



かすかにかすでき 〔上歌〕夕べの空も
ほのぼのと夕べの空もほのぼのと
月になり行く山陰の寂寞とある
柴の戸にこの御經を讀誦する
この御經を讀誦する

シテ女次第上
〔芭蕉に落ちて松の聲 芭蕉に
落ちて松の聲 あだなりや風の破

らん風破窓を射て燈消え
やすく月疎屋を穿ちて夢なり
がたき秋の夜すがら所から。物
すさまじき山陰に。住むとも誰か
白露の。ふり行く末ぞ哀なる
あはれ馴るゝも山賤の友こそ岩
木なりけれ。そめぬ色の深きや

〇小謠





法の花心深きや法の花心深め
ずはいかゞ徒に。その唐衣の錦にも
衣の珠はよも掛けじ。草の袂も露
涙。移ろも過ぐる年月は。廻り廻れど
うたかたのあはれ昔の秋もなし
あはれ昔の秋もなし。さても
われ讀誦の聲怠らず。夢現とも

わきて女人の身と見え給ふは。いかなる人にてましますぞ　シテ　これはこのあたりに住む者なるが。さも遇ひ難き御法を得。花を捧げ禮をなし。結縁をなすぞかりあり。とても姿をかへ参らすれば。行ひとか今はの情の言の葉草の庵の内を。





露の間ありと法のためなれ。結縁に貸させ給へとよ　ワキ　げにげに法の結縁の。真に妙なる御事なれども。さりながら。なべてならざる女人の御身にて。いかでお宿を参らすべき　シテ　その御心得はさる事なれども。よそ人ならずわれもまたすみ

かはこそ水の、同じ流を汲む
とだに知らぬ他生の縁による
○小謡
シテ〽一樹の陰の、ワキ〽庵の内は。借まし
お月もかり寝の露の宿もかり
寝の露の宿。軒も垣ほも古寺の。
愁の。崖寺の古りて破れ。魂は山行
の。深くして傷まし月の影も凄し

やおや誰かいひし。蘭省の花の時錦帳
の下とは。盧山の雨の夜草庵の
内ぞ思ふる。ワキ〽あまりて御志深け
れば。御經讀誦の程内へ。御入り候へ
シテ〽さらば内へ參り候べしあら有難や
この御經を聽聞させば。我等如
きの女人非情草木の類までも

頼もしうてこそ候へ　ワキカヽル「げによく御
聴聞候ものかな。只一念随喜の信心
あれば。一切の非情草木の類までも。
何の疑ひのあるべき　シテウケテ「さては殊更有難や。
さてさて草木成佛の。いはれを
猶も示し給へ　ワキ「薬草喩品あら
はれて。草木国土有情非情も皆。



これ諸法實相の　シテカヽル「峯の嵐や
ワキウケテ「谷の水音　シテワキ二人「佛事をなすや寺井の
底の心も澄めるをりからに　燈を
○小謡
背けて向ふ月のもと。背けて
向ふ月のもと。共に憐む深き夜の。
心を知るも法の人の。教のまゝなる
心こそ思の家ながら。火宅を出づる

道なれや。さればこそ柳は緑。花は紅と
知る事も。ただそのままの色香の
草木も。成仏の国土ぞ成仏の国土
なるべし。
ロンギ上 不思議やさても愚
なる女人と見えつるが。かかる法の
理白糸の解くばかりある心かな
シテ上 なかなかに。何疑か有明の。末の闇路
をもはるけずや。今遇ひ難き御法を得る
身とはいかが思えん
地上 げに遇ひ難き
法に遇ひ。受け難き身の人界と
シテ 受くる身ぞとやおぼすらん
地上 恥
しや帰るさの道さやかにも照る
月の。影ながら庭の面の。雪の
うちの芭蕉の。偽れる姿の真をと

見えざりかなあらんと思へバ鐘の聲。諸行無常とありてけり諸行無常とありてけり

中入間

ワキ「さては雪のうちの芭蕉の偽れる姿と聞えし疑もなき芭蕉の女と。現れけるこそ不思議なれ　たゞこれ法の奇特ぞとたゞこれ法の奇特ぞと。思へバひと夜もすがら。月も妙なる法の場。風の芭蕉や。傳ふらん風の芭蕉や傳ふらん

後シテ女　一声　拍子ニ合ハズ

「あら物すごの庭の面やなあら物すごの庭の面やな。有難や妙なる法の教には。遇ひ難き事稀なる優曇華の。花待ち得たる芭蕉葉の。御法

の雨も豊なる。露の恵を受くる
身の人衣のはめば綻せて。よかざかり
の。うつり来ぬれど花もなき「芭蕉
の露の。みだりまきる「庭野もせ山
陰のみぞ「寝られねば枕もあき
松が根の。現れ出づる海を見れば。
ありつる女人の顔ばせあり。さも



あれ御身はいかなる人ぞ「いや人と
しは恥しや。真はわれは非情の
精。芭蕉の女と現れたり「そもや
芭蕉の女ぞとは。何の縁にかかゝる
女體の身をぞ受けさせ給ふらん
「その御不審は御誤。何か定は
荒金の「土も草木も雨より降る

シテ　雨露の恵を受けながら　ワキ　われらの
知らぬ有情非情も　シテ　おのづからなる
姿となりて　ワキ　さも愚かなる

○小謡

シテ　女とて。上ゲ歌　さなきだにあだなる芭
蕉の女の衣の薄色の。花染ならぬ
ま袖の。ほころびも恥かしや。クリ　それ
非情草木といつぱ。眞は無相眞如の



體。一塵法界の心地の上に。雨露霜
雪の形を見す。シテサシ　然るに一枝の
花を捧げ。御法の色をあらはすや。
一花開けて四方の春。長閑けき空
の日影を得て。楊梅桃李数々の

○サシ曲独吟
○切迄囃子

シテ中　色香に染むる心まで。諸法實相
隔もなし。クセ　水に近き樓臺はまづ

○仕舞

月を得るなり陽に向へる花木は又
春に逢ふ事易きなるその理も
様々のげに目の前に面白やな
春過ぎ夏たけ秋来る風の音信
は庭の荻原まづそよぎそよかゝる
秋と知らすなり身は古寺の軒の
草忍ぶとすれど古も花は嵐の音





にのみ芭蕉葉の脆くも落つる露
の身は置き所なき虫の音の蓬が
もとの心の秋とてもなどか変らん
よしや思へば定めなき世は芭蕉葉
の夢のうちに牡鹿の鳴く音は聞き
ながら驚きあへぬ人心思ひいるさ
の山はあれどたゞ月ひとり伴ひ馴

れぬる秋の風の音起居茂き小笹原。さのみに思ひ立ちまふ袖暫しいざや返さん。今宵は月も白妙の。氷の衣。霜のはかま 序之舞

シテワカ上 霜の経。露の緯こそ。弱からし

地中 草の袂も。久方の。久方の。天つ少女の羽衣あれや。

○仕舞

シテ上 これも芭蕉の葉袖を返し

地上 返す袂も芭蕉の扇の風。茫々としたる物凄き古寺の。庭の浅茅生。女郎花刈萱。面影うつろふ露の間に。山颪松の風。吹き拂ひ吹き拂ひ。花も千草も散り散りて。花も千草も。散りにあれば芭蕉はやぶれて残りけり。

# 百萬　概説

内十六巻ノ四

奈良の都に百萬といへる女、唯一人なるみどり子に生きて別れしより心亂れ、嵯峨の大念佛の頃、清涼寺に參りて我が子の安穩、再會を祈りぬ。茲に同じく南都の男にして一少年を拾ひ取りし某、大念佛に參れるが、少年は彼の狂女を見るより我が母なることを告げしかば、其の生國、狂亂の因など尋ねしに、我が子に逢はんと願へる心の餘りにいたはしきより、遂に明して面會せしめしがば、狂女は佛の御恵なりとうち喜び、連れだちて歸りけり。

此曲サラリト粘ラヌ様ニ謡フベシ

小書　法樂舞

| 役別 | 子方 百萬ノ子 | ワキ 男一人 | シテ 狂女百万 |
|---|---|---|---|
| 装束附 | 着附縫箔　長袴　縫紋腰帯　扇 | 着附段熨斗目　素袍上下　小刀　扇 | 面深井　鬘　無色鬘帯　前折烏帽子　着附摺箔<br>長絹　無色縫箔　腰巻　無色縫入腰帯　狂女扇指ス<br>狂笹持ツ |

| 季 | 三月 | 曲柄 | 四番目<br>畧三番目（狂女物） |
|---|---|---|---|
| 所 | 山城國葛野郡下嵯峨<br>清凉寺釋迦堂 | 稽古順 | 三級 |

# 百萬

觀阿彌清次作

ワキ男　次第上　ヨワク　拍子ニ合

竹馬にいざや法の道。竹馬にいざや法の道。眞の友を尋ねん。

ワキ詞サラリ

これハ和州三吉野の者にて候。又これにわたり候幼き人は。南都西大寺のあたりにて拾ひ申して候。この頃は嵯峨の大念佛にて候程に。

この幼き人を連れ申し。念佛に
参らばやと存じ候　狂言
シテ女　あら悪の念佛の拍子やな。わらは
音頭をとり候べし。南無阿弥陀佛
地　南無阿弥陀佛　シテ中　南無阿弥陀佛
地　南無阿弥陀佛　シテ　弥陀頼む　地　人は
雨夜の月なれや。雲晴れねども西へ

○車之段
○独吟
○仕舞



ゆく　シテ中　阿弥陀佛やなまうだ　地上　誰か
頼まざる誰か頼まざるべき　シテ上　これか
や春の物狂　地　乱れ心か恋草の
シテ　力車に七車　地　積むとも尽きじ
シテ　重くとも。引けやえいさらえいさと
地上　一度に頼む弥陀の力。頼めや頼め南
無阿弥陀佛。　上　げにや世々毎の。親

○笹之段
○独吟
○仕舞

子の道にまよひて。親子の道に
まとはりて。なほこの闇を晴れやらぬ
シテ 朧月の薄曇
地 僅に住める世に
なほ三界の首枷かや。牛の車のとことはに
とはいづくをさして引かるらんえい
さらえいさらえい
シテ 引けや引けやこの車
地 物見なり物見なり
シテ げに百萬が
地 姿は もとより長き黒髪を
荊棘の如く乱して
地 古りたる烏
帽子引きかづき
シテ 又眉根黒き
乱墨
地 うつし心か村烏
シテ 憂かれ
と人は 添ひもせで
地 思はぬ人を尋
ぬれば
シテ 親子の契り麻衣
地 肩を結ん
で裾にさげ
シテ 裾を結びて肩にかけ

懸け（地）縁序（シテ）菅蓋のみだれ
心ながら南無釈迦弥陀仏と。信心
をいたすも我が子に遇はんためなり。
（シテ）南無や大聖釈迦如来我が子に遇はせ
狂気をもとどめ。安穏に守らせ給ひ候へ。
（子方）如何に申すべき事の候。（ワキ）何事にて
候ぞ。（子）これなる物狂をよくよく見

候へば故郷の母にて御入り候。恐れ
ながらよその様にて問うて給は
り候へ。（ワキ）これは思ひもよらぬ事を承り
候ものかな。やがて問うて参らせう
ずるにて候。いかにこれなる狂女汝
の国里はいづくの者ぞ（シテ）これは奈良の
都に百萬と申す者にて候（ワキ）それは

何故か様なる狂人とはなりたるぞ
シテ「夫には死して別れ。唯一人ある忘形
見のみどり子にすぎて離れては
狂ふ思ひが乱れては　ワキ「さて今も子と
いふ者のあらバ嬉しかるべきか
シテ「仰せまでもなしそれ故にこそ乱
髪の遠近人に面を晒すも。若し



も我が子に廻りや逢ふと車に法
の声立て。念仏申し身を砕き。
我が子に逢はんと祈るなり　ワキ「げに
痛はしき御事かな真信心私なく。
かほど群集のその中にて。かほど廻り
逢はざらん　シテ「嬉しき人の言葉かな。
それにつきても身を砕き法楽の

舞も舞ふべきあり。囃してたべや

人ゞよ、忝くもこの御佛も。羅睺

爲長子と說き給へば、我が子にて

鵝鴨の袖あはれや。親子鸚鵡の袖

あはれや百萬が舞をつくし給へ。百や

萬の舞の袖　我が子の行方祈る

ありげにや、わかれみれば、何處ぞそ

シテサシ上　○サシ面独吟　○同 囃子

ゝも住めば宿住まぬ時は故郷も

なし。この世はそも何處の程ぞや

牛羊徑街に歸り、鳥雀枝の深きに

集まる。げに世の中はあだ波の寄

るべは何處ぞ。水の身の果いかに

摘の葉の情の露の故郷に

シテ上　憂き年月を送りしも二年

○仕舞

しかけし中の。契の末は花鬘。
結びもとめぬあだ夢の永き別
となり果てて。比目の枕しき波の。
哀れはかなき契かな。○クセ奈良坂の。
児の手柏の二面。とにもかくにもねぢ
け人の。あき跡の波てす。袖の柵隙
なき。思重なる年並の流るる月日





三番目ノ時ハ
失せにけり
ト切

の数惜しき西の大寺の柳陰みどり
子の行方白露の。置き別れて
いづちとも知らず失せにけり。一方
ならぬ思ひ草。葉末の露もあらそひて
、よし奈良の都を立ち出でて帰り
三笠山。佐保の川をうち渡りて。山城
に井手の里玉水は名のみして。影

うつす面影凄ましき海なりけり。かくて月日を送る身の羊の歩隙の駒足に任せて行く程に。都の西と聞えつる嵯峨野の寺に参りつゝ。四方の景色を眺むれば。花の浮木の亀山や雲に流るゝ大堰川。真に浮世の嵯峨なれや。盛過ぎ行く。

山櫻嵐の風松の尾小倉の里の夕霞立ちこそつゞけ小忌の袖かざしぞ多き花衣。貴賤群集する此の寺の法ぞ尊き。かれよりもこれよりも。たゞこの寺ぞ有難き。忝くもかゝる身に申すは恐あれども。二佛の中間我等如きの迷ある道

あきらめんあるじとて、毘首羯磨が造りし赤栴檀の尊容やがて神力と現じて天竺震旦我が朝三国に渡り。有難くも此の寺に現じ給へり　安居の御法と申すも。御母摩耶夫人の孝養の御為なれば。佛も御母を悲しみ給ふ道ぞかし。

況んや人間の身として母を悲しまぬ子を恨み身をかこち。感歎してぞ祈りける　親子鸚鵡の袖なれや百萬が舞と見給へ。あら我が子恋しや　これ程多き人の中に。などや我が子のなきやらん。あら我が子恋しや我が子賜べなう南無釈

迦牟尼佛し我人なからもうにもや
逢ふし。信心のおきもと。南無阿弥陀佛。
南無釈迦牟尼佛南無阿弥陀佛し。
心ならずも逆縁ながら。誓ひて逢はせ
て賜びたまへあまりに見るも痛は
しや。これてそれてこの尋ぬる子よ。
よくよく寄りて見給へとよ　心強

〇小謡

やさしみもなき告り絵ならば。かやう
よ恥をばさらさらものともあらうぬ
しと思へども。またたま逢ひは優
曇華の。花待ちえたり夢か現か
幻か。よくよくものを案ずるによく
よくものを案ずるにかの御本尊
なもさよりも衆生のためなれば。

諸ともに廻りあふ法の力ぞ有難き。
願も三つの車路を。都に帰る嬉し
さよ都に帰る嬉しさよ。

## 船辨慶　概説

内十六巻ノ五

義經、頼朝と不和になり、都を落ちて西國に下らんとし、攝津國大物の浦に到りしに、辨慶、一行の中に静の在るを知り、義經に勧告して之を都に帰らしめ、船を艤して海上に出でしに、俄に暴風吹き出で、航行難義となり、加ふるに義經の為めに亡されたる平家の一門波の上に浮み出で、義經を苦めんとし、中にも知盛の亡霊は舷近く薄り来りて、其の身が海に沈められし如く、義經をも海に沈めんと挑みかゝるを辨慶祈り伏せ、亡霊は跡白波となりにけり。

此曲前ハ閑カニ半バ愁ヒノ心アレドモ後ハ全ク変リテ勇マシク強ク謡フヲ宜シトス
小書　前後ノ替　重キ前後替

| 役別 | | 裝束附 |
|---|---|---|
| 子方 | 判官 源義經 | 梨子打烏帽子　白鉢巻（又ハ紅梅色ニモ）　着附厚板唐織　積（ヌシ）　白大口　縫紋腰帶　太刀　神扇 |
| ワキ | 弁慶 | 兜巾（沙門帽子ニモ）　着附厚板　水衣　篠懸　白大口　紋付腰帶　莉高珠数 |
| ワキツレ | 義經 從者三人 | 梨子打烏帽子　白鉢巻　着附厚板　積　白大口　小刀 |
| 前シテ | 靜 | 面深井（若女ニモ）　鬘　鬘帶　着附摺箔　赤地唐織着流　爪紅扇　物着ニ靜烏帽子着ル |
| 後シテ | 平知盛ノ靈 | 面二日月（鷹ニモ）　黒頭（鍬形ヲ着ケ）　黒地鉢巻　着附無色　厚板唐織　法被　半切　縫紋腰帶　太刀佩　長刀 |

| 季 | 十一月 | 曲柄 | 五番目 |
|---|---|---|---|
| 所 | 前ハ攝津國尼崎大物浦　後ハ攝津國尼崎沖海上 | 稽古順 | 四級 |

# 船弁慶

禪鳳元安作

ワキ弁慶
ワキツレ三人立衆サラリ
次第上ツヨク
拍子ニ合

今日思ひ立つ旅衣。今日思ひ立つ旅衣。歸洛をいつと定めん。

（ワキ）かやうに候者は。西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にて候。さても我が君判官殿は。頼朝の御代官として。平家を亡し給ひ。御兄弟の御

中日月の如くにて候ふべきをいひかひなき者の讒言により。御中たがひに成る事。返す返すも口惜しき次第にて候。然れども我が君親兄の禮を重んじ給ひ。一まづ都を御開きあつて。西國の方へ御下向あり。御身にあやまりなき通りをも御歎きあるべきために今日夜をこめ淀より御船に召され。津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候

サシ上 ワキ立衆四人 拍子ニ合ハズ

頃は文治の初めつ方。頼朝義經不會の由。既に落居し力なく

子方 判官

判官都を遠近の道せばくならぬその先に。西國の方へと志し

ワキ

まだ

夜深くも雲居の月。出づるも惜しき都の名残。一年平家追討の。都出には引きかへて。たゞ十余人。すごすごと。さも疎からぬ友舟の上り下るや雲水の身の定めなき習ひかな世の中の。人は何とも石清水。人は何とも石清水。澄み

濁るをば神ぞ知るらんと。高き御影を伏し拝み。行けば程なく旅心。潮も波も共に引く大物の浦に着きにけり大物の浦に着きにけり

御急ぎ候ふ程に。これははや大物の浦に御着きにて候。某存知の者の候ふ間。御宿の事申し付けう

すゝみて候。如何よての家の主(アルジ)の
わたり候か　〽狂言 誰にて御(オン)入(ニ)り候ぞ
〽ワキ いや武蔵(ムサシ)にて候　〽狂言 さて唯今は何の
ための御(オン)出(イデ)候ぞ　〽ワキ さん候我が君
をこれまで御(オン)供(トモ)申して候。御(オン)宿(ヤド)を
申し候へ　〽狂言 さらば奥の間(マ)へ御(オン)通(トホ)り
候へ。御(ゴ)用(ヨウ)心(ジン)の事は御(オン)心安く思(オボ)し召(メ)

されば候へ　〽ワキ 詞カヽル 如何に申し上げ候。恐(オソ)れ
多き申し事にて候へども。正(マサ)しく
静(シヅカ)は御(オン)供(トモ)と見え申して候。今
の折(ヲリ)節(フシ)何とやらん似(ニ)合(ア)はぬ様(ヤウ)な
御(ゴ)座候へども。あつぞ。これより御(オン)返(カヘ)し
あれかしと存じ候　〽子方 サラリ ともかくも弁
慶計(ハカラ)ひ候へ　〽ワキ 詞カヽル 畏つて候。さらば静の

御宿へ参りて申し候べし。いかにこの
家の内に静のわたり候か。君よりの
御使に武蔵が参じて候。武蔵
殿とはあら思ひよらずや。何のため
の御使にて候ぞ。さん候唯今参る
事余の儀にあらず。我が君の御
諚にはこれまでの御参り返す返す

も神妙に思し召され候。さりながら。
唯今は何とやらん似合はぬ様に候
へば。これより都へ御帰りあれとの
御事にて候。これの思ひもよらぬ仰せ
かな。何くまでも御供とこそ思ひ
しに。頼みても頼みなきは人の心なり。
あら何ともなや。候さて御返事

さば何と申し候べき　シテ「みづから御供申し。君の御大事にてあり候はゞ留り候べし　ワキ「あら事々しや候。たゞ御とまりあるが肝要にて候　シテ「よくよく物を案ずるに。これは武蔵殿の御計らひと思ひ候程に。わらはまいり直に御返事を申し候べし

ワキ「それはともかくもにて候。さらば御参り候へ。如何に申し上げ候。静の御参りにて候　子方「いかに静。この度思はずも落人となり落ち下る所に。これまで遥々来りたる志。返す返すも神妙なり。さりながら。遥々の波濤を凌ぎ下らん事然るべからず。

まづこの度は都より上り時節を
待ち候へ　シテ　さては真に我が君の御
諚にて候ぞや　よしなき武蔵殿を
怨み申しつる事の恥かしさよ　返
す返すも面目なうこそ候へ　いや
いやこれは苦しからず。たゞ人口を
思し召すなり御心裏をもおぼ

しめすと涙を流し申しけり
シテ　いやとてかくも数ならぬ身にて御恨みも
なけれども是は舟路の門出なるよ
上歌　○小謡　拍子二合
浪風も静かに留め給へと留
め給ひ涙と流し木綿四手の
神かけて変らじと契りし事も
定めなや　げにや別れより勝りて

惜しき命かな君に二度逢はんとぞ思ふ行末。めづらし弁慶。静に酒すゝめ候へ　畏つてさらばお酌を申し候ふべし　これは御門出の。行末千代ぞと菊の盃。静にこそはすゝめけれ　わらはも君の御別れやる方なくかきくれて。涙に咽ぶばかりなり　いやいや

これは苦しからぬ。旅の舟路の門出のわかただ一さしとすゝむれば

シテ　その時静は立ち上がり。時の調子を取りあへず。渡口の郵船は風静まつて出づ　波頭の謫所は日晴れて見ゆ　これに烏帽子の候召され候へ　物着

シテ　立ち舞ふべくもあらぬ身の。袖うち

○サシ曲独吟
○中入迄囃子

かゝるも恥かしや。傳へ聞く陶朱公は勾践を伴ひ。會稽山に籠りゐて。種々の智略をめぐらし。終に呉王をほろぼして。勾践の本意を達すとかや。然るに勾践。二度世をとり會稽の恥を雪ぎしも。陶朱功をなすとかや。されば越の臣下にて。

○仕舞

政をも身に任せ。功名富み貴く。心の如くなるべきを。功成り名遂げて身退くは天の道と心得て。小船に棹さして五湖の。煙濤をたのしむ。かゝる例も有明の。月の都をふり捨てゝ。西海の波濤に。赴き御身の科のなきよしを歎き

絵の頼朝も。終には靡く青柳の。
枝を連ぬる御契。などかは朽ちし果
つべき。〽ただ頼め 中之舞
〽ただ頼め。しめぢが原のさしもぐさ
〽われ世の中にあらん限りは 〽かく
尊詠の偈あらば。かく尊詠の偈
なくや。やがて御供申出舟の 〽舟子

時ぞや纜を疾く疾くや纜を
疾く疾くと。勧め申せば判官も。
旅の宿りを出で給へば 〽静は泣く
泣く烏帽子直垂脱ぎ捨てて。涙に
むせぶ御別れ。見るめも哀れなりけり
見るめも哀れなりけり。中入
〽静の心中察し申して候。やがて御舟

を出さうずるにて候 ワキツレサラリ いかに申し候

ワキ閑カニ 何事にて候ぞ ワキツレサラリ 君よりの御諚には。

今日の波風荒く候程に。御逗留と

仰せ出されて候 ワキカツテ 何と御逗留とや

ワキツレウケテ さん候 ワキカツテ これは推量申すに。静に

名残を御惜みあつての御逗留と

存じ候。まづ御思案あつて御覧候へ。

今この御身にてかやうの事は。御

運もつきたると存じ候。その上一

年渡辺福島を出でし時は。もつて

の外の大風なりしに。君御舟を出し。

平家を亡し給ひし事。今以つて

同じ事ぞかし カル上 拍子不合 ツヨク サラリ 急ぎ御舟を出す

べし ワキツレサラリ げにげにこれは理なり。いづくも

敵も夕浪の ワキ「立ち騒ぎつゝ舟子共
地「えいやえいやと夕汐につれて舟を
ぞ出しける ワキ「あら笑止や風が変
つて候あの武庫山颪譲葉が嶽
より吹きおろす嵐にこの御舟の
陸地に着くべきやうもなし皆々
心中に御祈念候へ 狂言「いかに武蔵



殿この御舟には妖かしが憑いて候
ワキ「あゝ暫くさやうの事をば船中にて
は申さぬ事にて候 狂言「あら不思議や
海上を見れば西国にて亡びし平家
の一門各々浮び出でたるぞやかゝる
詞「時節を窺ひて恨をなすも理なり
子方「いかに弁慶 ワキ「御前にて候 子方「今更驚くべ

からずたとひ悪霊恨をなすとも。そ
も何事のあるべきぞ。悪逆無道の
その積り。神明仏陀の冥感に背き。
天命に沈みし平家の一類。主上
を始め奉り一門の月卿雲霞の如く。
浪に浮みて見えたるぞや

○切迄囃子

後シテ知盛上手ゟ早笛

○切迄仕舞

そもそもこれは桓武天皇九代の



後胤平の知盛幽霊なり。あら珍
しやいかに義経。思ひもよらぬ浦波
の。声をしるべに出船の。声をしるべに
出船の。知盛が沈みしその有様に
地 又義経をも海に沈めんと。夕浪に
浮める長刀取り直し。巴波の紋
あたりを払ひ。潮を蹴立て悪風を

吹きかけ眼もくらみ心も乱れて前後を忘ずるばかりなり　その時義經少しも騒がず　その時義經少しも騒がず打物抜き持ち現の人に向かふが如く言葉を交し戦ひ給へば弁慶押し隔て打物業にて適ふまじと珠数さらさらと押し

もんで東方降三世南方軍荼利夜叉西方大威徳北方金剛夜叉明王中央大聖不動明王の索にかけて祈り祈られ悪霊次第に遠ざかれば弁慶舟子に力を合せお舟を漕ぎのけ汀に寄すればなほ怨霊は慕ひ来るを追つ払ひ祈りのけ又

277
602

版權所有
複製不許

大正拾一年三月十日印刷
同　年三月十五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋
京都市上京區二條通麩屋町東北角

發行兼印刷者　檜常之助
東京市神田區錦町二丁目拾番地

發行所　檜大瓜

印刷所　江川堂
東京市四谷區傳馬町貳丁目



引く汐にゆられ流れ又引く汐に
ゆられ流れて跡白波とぞなりに
ける。

終